

Tasker, S. L., & Stonebridge, G. G. S. (2016). Siblings, you matter: Exploring the needs of adolescent siblings of children and youth with cancer. *J Pediatr Nurs*, 31(6), 712-722. <https://doi.org/10.1016/j.pedn.2016.06.005>

論文タイトル：

きょうだいさん、あなたのことが大切です：がん治療に臨む子どもと青年の思春期にあるきょうだいのニーズを探索する
Siblings, You Matter: Exploring the Needs of Adolescent Siblings of Children and Youth With Cancer

キーワード (Key words)：

● きょうだい、がん、ニーズ、ユーモア、サポート、思春期. Sibling, Cancer, Need, Humor, Support, Adolescent

著者：Susan L. Tasker, PhD¹, & Genevieve G.S. Stonebridge, MA²

所属：¹ビクトリア大学 教育心理・リーダーシップ学, カナダ

²ビクトリア大学 教育心理・リーダーシップ学, カナダ；インスパイアヘルス サポートティブ・キャンサー・ケア, 臨床カウンセラー, ビクトリア, ブリティッシュコロンビア州, カナダ

ハイライト (Highlights)：

- きょうだいたちには、愛する人や他者から注目され存在が承認される、というニーズがある。
Well-siblings need attention and acknowledgment from loved ones and from others.
- きょうだいたちは、人に負担をかけないように、感情や気持ちを内に秘めている。
Well-siblings internalize emotions and thoughts so as not to burden others.
- きょうだいたちは、自ら内に秘めた感情や気持ちに苦しんでいる。
Well-siblings are burdened by their internalized emotions and thoughts.
- きょうだいたちは、きょうだいに特化した支援を求めている。
Well-siblings need support available specifically to them.
- 家族のなかにユーモアが、そして笑いと明るさや心地よさがあることが、きょうだいたちにとって重要である。
Humor, laughter, and light-heartedness in the family is important for well-siblings.

要旨 (Abstract)：

目的: 本研究の目的は、がんの治療に臨む子どもの思春期にあるきょうだいの心理社会的なニーズについて、更なる理解と知見を得ることである。

計画と方法: 現象学の理論的枠組みに基づき、過去を振り返る形式でのナラティブインタビューを用いて、過去にがんを診断され治療した方々のきょうだいで、現在成人している7名よりインタビューデータを収集した。

結果: 8つのニーズに基づくテーマが特定された。きょうだいが、“子どもでいることができること”や、“家族にユーモアや笑い、明るさや心地よさがあること、”といったニーズは、がん治療に臨む子ども・若者の思春期にあるきょうだいのニーズを調査したこれまでの文献に新たな知見をもたらすものである。

結論: 本調査結果は、特に思春期のきょうだいに関連するものとして、がん経験のなかでのきょうだいのニーズに、現在までの文献に新たな見識をもたらす広げるものである。

実践への示唆 (Practice implications)：

- がん闘病期間中の思春期のきょうだいのニーズは、個別に認知し、理解し、サポートすることが重要である。本研究結果は、がんの治療に臨む子ども・若者の家族のなかに、ユーモアがあることの効果的な役割を励まし支援する専門家にとっても役立つ。遺族ではないきょうだいを含め、数年後でも、フォローアップサポートがあることがきょうだいには役立つことがある。

◎この論文を紹介した委員からのお勧めポイント◎

- 本文中には、がん治療中の子が発してくれたユーモアが、きょうだいの心を救ったエピソードが紹介されています（脱けた髪の毛を、きょうだいの頭にのせたことが、その時のきょうだいにとっては世界一面白かった。など）。すべてが深刻で硬直する状況にあるからこそ、家族のなかの日常にユーモアが、出したい時に出せること、そしてそのユーモアに気づき拾える医療者がいることも大切なことだと改めて感じました。
- 複雑な心情や不快な思考にいたることは当然である（きょうだいという立場であれば、妬んだり憤ることなどは、人として何らおかしいことではない）ことを知ること、などその他示されている全8ニーズは、指標として参考になると感じています。

◎その他の委員からのコメント◎

- お子さんが亡くなったあとに、病室でその子のお兄ちゃんと親御さんとでハンドプリントを作ったことがあります。お兄ちゃんが弟の武勇伝や失敗談を語りながら、弟の好きな色を選んで、“笑顔で”ハンドプリントを作っている姿をみたとき、今家族がここで亡くなったという悲しみをユーモアと笑顔が包み込んでいるという感覚を覚えました。どんなに過酷で深刻な文脈のなかであってもユーモアや笑顔を自ら作り出せる力が子どもにもあるのだと実感し、この論文と重なりました。 国際交流委員 平田美佳
- ある親御さんが入院初期に一度家に帰ろうとしたときに、「俺よりパパの方が好きなんだ」と泣かれ、逆にそんな子どもに教われたとお話されていたことを思い出しました。きっとそれを聞いたパパも、少し気持ちが和んだはずですが、そんなユーモアの家族への広がりや、ケアとしての意味をもつと示していることがとても興味深かったですし、思春期以外のきょうだいにも共通する大切な要素と感じます。加えて研究という意味でも、思春期のきょうだいの声を届ける貴重な報告です。日本ではきょうだい本人からの知見はまだほとんどなく、その理由としてきょうだいへのアプローチの難しさがあるように思います。この研究ではFacebookや慈善団体からの周知でリクルートしたり、インタビューは一部オンラインを活用するなどして実現しており、方法の色々な工夫やヒントも教えてくれています。 国際交流委員 入江亘

